

いわきの街が変わった —留学生別科生に多くを学ぶ—

東日本国際大学経済情報学部教授・留学生別科長 中田 秋男

昨年の10月から11月にかけて、いわき駅前の「ラトブ」オープンに合わせた社会実験として多数のイベントが催された。その際「ラトブ」オープンなどによって、どれだけまちなかの交通量に変化があるのかを調査するチームに、留学生と一緒に参加した時のことである。

東京の私立大学で4年間勉強し、地元へ戻って町役場に就職が決まっているという青年が、留学生と一緒に交通量調査を行っていた。その時彼は「いわきは変化している」と筆者に語ってくれたのが妙に印象に残っている。それは、たまに戻ってくるから気がつくことなのかもしれないが、東京から戻る度に何かしらいわきの街が変わっているという。

調度この日はお昼頃から雨が降ってきており、我々は駅前の軒下を利用して自転車と自動車の交通量をカウントしていたが、目の前の信号の所では、赤い大きな傘をさし、足元は濡れないように透明な白い傘で覆って椅子に座って、同じように交通量を調査している二人の留学生がいた。青年は「後ろの看板に日本語がなければ、ここは何処なのかわからない不思議な空間だ」と話していたのを思い出す。

しかし、ここは正真正銘いわきである。いわきの街を歩けば、本学の留学生も含めて、必ず「外国人」の姿を目にするようになってきた。そして、それは今では日常的風景の一部になってきており、知らない間に、しかし確実にいわきの街の風景が変化してきているのである。

グローバリゼーションという大きな流れの中で、いわきも例外ではなく、さまざまな分野で影響を受けながら街は変化していくのかもしれない。

ところで、筆者は昨年から大学の授業と平行して、大学への準備課程ともいえる留学生別科で教えている。日本語を教えながらも、留学生からは実に多くの事を教えてもらっているような気がする。例えば、去年の5月頃であるが、日本に来たばかりの留学生から「センセイ、『ゴク로우サマ』って

どういう意味ですか」と聞かれたことがある。話を聞いてみると、いつも新聞を配っている家の人から毎日「ご苦労さま」と声をかけられている、というのである。

これを聞いて、すぐにこの声をかけてくれる人に感謝したい気持ちになった。留学生はこの「ご苦労さま」という日本語を、この家の人の姿と一緒に記憶し、決して忘れることはないだろう。言葉は机の上で繰り返し暗唱することも大切だが、その言葉が使われた状況と関連付けて覚えると確実に身につくのである。

あれから9ヶ月が過ぎ、彼等もだいぶ日本語が話せるようになってきている。先週は、クラスの留学生に3分～5分の自己紹介を兼ねたスピーチをしてもらいテープに声を録音することにした。彼等が自分の夢について語った内容には、今の日本人が忘れてしまっているようなものがあった。

すなわちある留学生は日本で一生懸命勉強したら、自分の国へ戻って「親孝行」をしたいと言った。一緒に住んで両親の面倒をみるのが嬉しいとの事であった。それは、お金がなくても大丈夫なのだという。また、年を取った人たちを若者が助けるのは自然なことでしょうと、明るい笑顔で当たり前のようにいった。この「親孝行」の話聴いて、思わず「うるっと」きてしまい、気がついたら発表した彼女にエールの拍手を送っていた。

また、別の留学生は自分の村に図書館を造りたいとの事であった。そこでは本が無料で借りられ、みんなが集まれる場所にしたいのだという。この村にとって図書館は日本とは違い、とても重要で大きな意義のある存在なのである。村のために図書館を造るという計画は、筆者のような本の愛好家にとっては無性に応援をしたくなるものである。

大学へ通うために、雨の日も、風の日も、朝に晩にと毎日新聞配達をし、あるいは飲食店やスーパーでアルバイトをしながらも、「第二の故郷いわき」で、彼等の心は自分の生まれた村や町の事を考えているのである。

2007年日本の留学生は約12万人である。福田首相は1月の施政方針演説で「留学生30万人計画」を策定したが、それは2025年頃までを想定しての事である。しかし、それに対応して「受け入れ体制」や「支援システム」が早急に整備されていかなければならない。

それは、単にハコ、モノを造れば良いというわけではなく、私たち自身の「内なる国際化」が問われているのである。「異文化共生の時代」は既に始まっているのである。